

☆講演☆

# 人間の発達と文化

M・J・ラングフエルト

通訳 伊藤恭子

## 最初に簡単な実例から——身体の限界を超えること

ここにテーブルがあります。このテーブルの上で、私は子どもと一緒に遊んでいます。私はテーブルの上に、まずはじめに積木を三つ並べて立てます。それからその上に、積木を二つこのように横に置くと、小さな橋の出来上がりです。(図1) 私はその橋の上をトントンと(手で)歩いて渡ってみせます。そう、私は子どもに、何を体験してもらいたいかを見せていくわけです。さて次に私は、ちょっと難しいことをやつてみせます。その橋を壊して、同じような橋を作るよう子供にも言うのです。その橋を壊して、同じ五歳の子どもは一体どうするでしょうか。

(これは、一九七九年十一月十日に  
お茶の水女子大学人間文化研究科  
会議室で行なわれた講演です。)

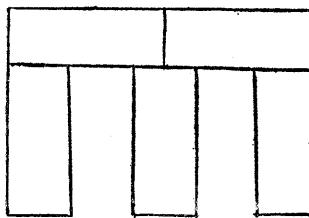
会場の皆さん。皆さんにお目にかかる嬉しく思います。

今日は、教育者として子どもにかかわっている私達にとって、根本的に大切だと思われる観点から、子どもと、その発達についてお話ししたいと思います。人間及び人間の子どもについて考える時、私達がまず身体的な条件に関心を持つのは当然のことです。けれども人間の子どもは、非常に短期間のうちに、身体の持つ限界を超えてします。そのことを示すために、幼い子どもに関する簡単な実験の例を、黒板を使って説明しましょう。

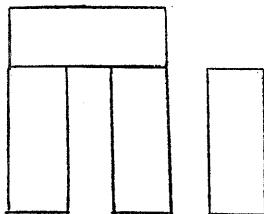
まず私がやつたように積木を三つ並べて立てるでしょうね。そして、その上に四番目の積木をこのようにぴったりと置きます。(図2)では五番目の積木は? そう、皆さんには事態がおわかりですね。皆さんはきっと、この積木はもうこれでおしまいだ、と思われるかもしれません。ところが、幼い子どもは素晴らしい答を出したのです。その子どもは五番目の積木をこのように置いて、下から人間の指で支えたのです。(図3)

私が今申し上げたことは、この幼い子どもの場合、機械的な構造と生体的な構造とが完全には分化していないということです。子どもが下から指で支えているので、ちゃんと渡れるような橋になつていているわけです。でも子どもは、これでは遊べないと思うでしょう。私が、「指をかけてどちらん」と言えば、それで橋は落ち

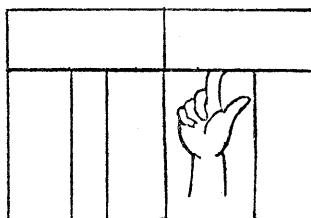
▼ 図1



▼ 図2



▼ 図3



てしまふのですから。でも、子どもにそのようなことを言うのはいいことです。もう少し大きくなれば、今お見せしたようなことをやっても、同じトリックにひつからないようになるからです。つまり、子どもは、身体を中心とした世界ではなく、機械的な世界へ足を踏み入れているということなのです。そして大体五歳頃になると、生体の世界と、道具的、あるいは機械的世界といふ、二つの世界の分化が起ころります。このような分化が次第に明瞭になっていき、ついに分離ができた時、その子どもは自分の身体の世界とは別の世界を見い出したと言えるのです。

大人である私達も、このような経験を知つてはいながら、知つているということを、はつきりとは認識してはいないのです。もちろん、今挙げた例が、唯一の例ではありません。

子どもがどのようにして自分の身体の限界を超えて機械的構造の世界に入っていくか、もう一つ非常に簡単な例を挙げて説明致します。これではまだ自己の身体の指示に終っています。でも月が出れば月を指さしたり、また、鳥や犬を指さしたりしますね。何かを指さした時、ごく小さな子どもはあなたの手を見ますが、指さされたものには興味を持ちません。あなたの手は何もしていないからです。でも少し大きな子どもになると、あなたの手が何かをしていることに気づきます。それで、どうするでしょうか。私の指から目を離して、指さしているものを見て、「あ、おつきさま」と言うでしょう。私の指と私の指さしているものとの間に一体何があるのでしょう。そうです皆さん、その間には何もないのです。唯こうして指をさしているだけです。幼い子どもでも、

すでに、このような身ぶりの持つ意味を発見し、理解はじめ、そこから大切な全体的世界が始まるのです。

このように、子どもの中で、これらのことなどがどのように発達していくかを研究していくことは、大変重要なことです。大人が赤ん坊に声をかけながら、あるいは歌を歌いながら、または「私のかわいい赤ちゃん」というようなことを言いながら、ベッドの上からのぞき込むと、目の前にいるその人の顔を、びっくりした表

情で見ていることに気づくようになります。その時、赤ん坊はその音のする方を見たり、音を発する口を見ているだけではないのです。しばらくすると子どもは、声を聞く時にはその声に意味を求めるようになるのです。そして子どもはごく初期から、この種の発見をいくつもしているのです。

例えば、子どもは一日のある時間になると、玄関のドアが開くことを予期します。一体何を待っているのでしょうか。そう、お父さんの帰りを待っているのです。何回か体験を繰り返すと、まだお父さんの姿が見えないので、そわそわし始めます。そして、ほら、やっぱりお父さんのお帰りです。庭のとびらとか、玄関のドアが開く音を聞いたり、玄関のドアが開いて足音が聞こえると、子どもは顔を上げて何かを予期します。つまり事実の先回りをするのです。

このように人間は、何らかの記号や物の体系を理解できる存在であります。そして非常に早くから、この世に誕生したその時から、私達がその身体的条件に気をとられていても——また確かに氣を配らなければいけないのですが——身体の限界を超えていくこととして、意味の世界へ入ろうとしているのです。

どのようにして、意味の様々な世界が統合されて、一つの一貫した理解の領域へと統一されるかを説明するとなると、一回の講

演どころか何回もの講演になってしまったことでしょう。このようない、身体の限界を超えるということは、魔法でも、神秘でも、また偶然の出来事でもありません。それは、ご存知の通り、意味の世界へと入っていくことなのです。

### 世界に意味を見い出すことができなかつた

#### 子どもたちのこと

ところで、極度にないがしろにされた子どものことを考えてみましょう。ないがしろにされているとは、主にどういうことでしようか。それは、子どもが人間の間に生じる意味の世界を学べないということです。言葉や母国語を学べないというだけでなく、それよりもっと深刻なことなのです。

私自身、この世界の様々な土地にゆき、子どもが全くないがしろにされたり、完全に受動的なままでいたりすることがあるのを見ました。食べ物を求めて泣くだけであったり、食べ物を得るだけでもう精一杯という子どももありました。また、誕生直後にごみ箱に捨てられた子どもにも会いました。その母親は、「捨ててしまつた方がいいんです。その方がいいんです」と言うのです。この場合、その若い母親自身、自分が住んでいる世界の中で“人間”と触れることができなかつたのです。子どもは母親にとって

何の意味も持たず、従つて、子どもも世界に何の意味も見い出すことができませんでした。子どもが自らの生に何の意味をも持たないから、母親は「捨ててしまつて」と言えたのです。その結果、子どもはこの世界に何も発見できなくなつたのです。始まりが即ち終わりでした。この例から大変重要な問題が出てきます。つまり、単に遊ぶだけでなく、人との間のコミュニケーションがなくてはならないということです。

ここでしばらくの間、子どももや母親の問題をわきに置いて、全世界や全歴史を眺めてみましょう。人間は、歴史や文化を通して、意味の世界を作り上げてきました。私はこれからの教育は、理論だけではいけないと思います。教育は食べ物と同様に不可欠なものであります。人間は生れながらにして人間(human-person)なのではなく、人間になれる可能性と必要性を持つたもの(human-animal)として生れてくるのであります。良い結果になるかどうかは別問題ですが、ともかくも、人間は教育から始まるのです。だからといって、物理的条件が重要でないというわけではありません。物理的環境が備えられなくては教育はできません。しかし、物理的条件が備わったからといって、意味の発見は育たないのです。何らかの発見ができるような機会を、子どもに与えてやらねばなりません。それは普通大人が認識しているよりも長い期

間にわたって、いろいろな仕方で子どもの中に作られてゆくものです。

例えば皆さんは日本に住んでおられて、日本舞踊をよくご存知です。日本舞踊を見ると、人間の身体が大変特殊な意味に解釈されていることがすぐにわかります。また、世界の別の地域に行つてみますと、大変原始的な舞踊の型があります。何世紀にもわた



▲歓談中のランゲフェルト教授

る文化によって、その文化の中で舞踊が意味を持つようになり、特殊な反応と特殊な型が出来上るのでです。もし私達が、将来の踊り手を養成するのを怠るとどうなるでしょうか。例えばフランスにゆきますと、「小ネズミ」と呼ばれる女の子がいますが、七歳にしてすでにフランス式の踊りを習得し始めているのです。その優美な動きは自然ですが、しかし決して自然発生的なものではありません。それは人間がつくり上げたものなのです。終戦直後、パリを訪れた時のことです。ある老紳士が突然私の腕をつかんで、戦時中の、あの靴とはいえないようなひどい靴をはいている三人の少女を指さして私に言ったのです。「ああ、なんということだ。見て下さい。歩くことはもうできなくなってしまった。」その紳士にとって、本当の歩き方は、もう見られなくなってしまっていたのです。ですから子どもが少し大きくなつた時、何か悲しみべきことが起つたかもしません。昔のような優美な姿で歩けなくなるかもしないのです。

戦後、ドイツの強制収容所に入れられていた少女が、私のところに連れられて来た時のことから少し考えてみたいと思います。その少女が部屋に入つて来た時、私がすぐに気づいたことは少女の歩き方でした。どんな歩き方だったのでしょうか。のちに、強制収容所で、少女の目の前で何が起こったかを聞いたのですが、

十一歳の少女が、彼女の表現を借りるならば、自分の母親が“ボロボロになつていいく”(rotting away)のを見ていたのです。そ

### 理解し理解される信頼関係——ローション

の少女はまさに“ボロボロになつていいく”ような歩き方をしていました。母親は飢え、飢え、飢えながらも、自分のひとかけらの食べ物を、七歳の小さな妹に与えました。そのあげくに、妹も死に、そして母親も死んでしまつたのです。こんな場合、人はどのように自分の身体を体験するをお思いですか？ その少女に私が「手を出して。一緒に踊りましょう。」音楽をかけて、さあ踊りましょうと言つた時に、少女はどうしたと思ひますか？ 少女は踊るといひはできませんでした。全くできませんでした。

このように、有意義性といふものは、いつもその人自身と共にあります。もちろん、年齢によつて異なつてはいますが、教育者である私たちは、今お話ししてきたようなささいな事が、幼い子どもの全人間的発達にとって、大変重要な位置を占めていることを認識しておかねばなりません。ここで付け加えておきたいことは、私達がここで、ある状況を提供し、それは子どもにとって、嫌な体験ではなかつたといふことです。ですから、それは決して、無意味なことではありえないのです。

最初の例で子どもがやつたように、あなたが積木を指で支えてしまつたら、それでその話は終わりになるでしょう。でも有難いことに、子どもは有意義の世界に入つてしまつてゐるのです。そこには別の世界があります。私も積木を指で支えることができますが、それでも私はその世界をすでに超えてしまつてゐるのです。

「そんな問題はもぢろん解けるさ」とおとなは言うでしようね。有意義の世界とは、おとなが共にいる世界で生れるものです。もし問題がうまくいかないときには、誰かがいて助けてくれるでしょう。子どもはおとなを信頼しています。ですから、うまくいかない場合でも、おとなが説明してくれ、助けてくれることを信頼しているのです。これらのことの根底には、直接的な人間どうしの関係があるのです。おとなが子どもに対し気を配り、いつでも助けられる状況にあるといふれば (being available)、「私はいいやもしにいりますよ」ということが、最も大切なことなのです。これは、子どもを甘やかすといふことではなく、コミュニケーションの一形態なのです。それは人と人との間の直接的な関係

であり、私達はそのような関係を作り上げなければなりません。

今日、ここで、私共の言語が違っているために、そのような関係をなかなか見い出せますが、でも、何らかの方法を、通訳の力を借りて見い出そうとしています。皆さんが静聴してくださっているので、見い出せるでしょう。ここには最初から、双方の側に、理解し、理解されようとする意図があります。大人の側からの、依存的な子供に対する関係も同様です。そこには最初から、結び合い、頼り合っている関係、すなわち信頼があります。もう一步先へ進むと、もう一つの関係、人間の言語が登場します。これは人間としての表現にかかるのですが、私はそこにも信頼が根底にあると思います。それは、子どもに対する人間的な関係の倫理的土台といつてもよいでしょう。このような簡単なことから始まって、段々と高い思考水準へと移っていくのです。子どもや他の人に対する人間関係の場の中で、それぞれの文化において、何が作られてきたかを、益々問わなければならなくなつきました。そのような関係を、私達は十分に正しく理解しているでしょうか。人々はそのようなことを学ぶために大学に来、私達は当然、大學が、頭の中の想像だけでなく、突然にある事實を生み出してくるものと期待します。人間の子どもに対する全人間的関係を発達させることによつて、私達は人間文化の完

全な発達をとげることができるのです。様々な文化において、そのような関係がどのようにして発達してきたかを、ここで語る時間はありません。皆さん御自身が、自身の文化の中で、これらのことがどのようにして発達してきたかを問えばよいのです。人間の子どもについて考える時、この「人間」という語を、少しく強調しなければならないことが、段々と明らかになってきています。この人間性という観念の中にこそ、子どもの出会いの根源があるからです。この人間性という観念は、さまざまな理論や、ひろく普及している特定の概念においてあるだけではなく、私達自身の中から育つてきた生の事実の中にあるからです。子どもに何らかの教育面での援助を与えたいと思う時、一人の子どもと他の子ども、ある両親と別の両親とでは、かかえている問題や疑問が大きく違つているのだということに気づかれるでしょう。私が障害を持つた子どもを相手に、実際的な仕事を始めた時、子どもだけではなく、その両親をも対象にしました。両親の方も問題を抱えていたからです。しかし、はたして両親は、子どもとの問題が両親の問題であることを認識し、理解していたでしょうか。もちろん問題は、両親と子どもの両方にあるのですが。ですから、教育にとっての問題は、この二つの方向に、どのようにして援助を与えるかということにあるのです。ずっと、両親、子

じるものと言い続けてきましたが、教師と子ども、教師と両親、両親と子ども、さらにもうと別の関係も含みます。ある家族の中のある子どもの人生のために、このような全てを含む場において、私共は仕事をしているのです。しばらくすると、新しい出来事が起り、その子どもが新しい問題にどのようにして対処していくかという問題が新たに生じます。ですから、両親と教育者との間におまく意志の疎通があり、考え方の交換がなされることが大切だと思いますし、教育者としての自分自身に対する批判が、大変重要な条件になると思います。つまり、教育上の様々な問題にかかわっている教育者は、チームで共に仕事をする一団の人々が必要とするだらうということです。ここで再びコミュニケーションの問題が持ちあがってきます。大きな問題を抱えていると感じている人が、チームでの討論で、その問題を打ち明けることができるかどうかという問題です。もしうきなければ、チームはその人にとって適切なものでなく、その人は何か別のものを探すでしょう。私自身、両親と子どもを、一人以上の関係にもつていくことが、長年の仕事の一部でした。もちろん、問題はチームを組んだからといって、ただそれだけでは解決されません。チームにも限界はありますし、また失敗もあります。ある種の職業では、チームを組むことは、そんなに簡単なことではありません。この点に

ついての私の経験から申し上げますと、医者とチームを組むのは、しばしば容易ではありませんでした。医者という立場は非常に強いですし、それに医者は、子どもの中に何が起つているかをわかつていません。また、わかつていないということを知らないのです。小児医学の専門医が、寝ている子どもがどうやって起きあがる意欲を起こすのかを知らないこともあります。また、医学的な知識が非常に限られている分野もたくさんあります。それにもかかわらず、しばしば医者は「私にはわかりません」と言うことができないのです。私達の方がました、と言つてはいるのではありませんよ。私達には私達の欠点や間違いがあります。ただ一例を示したにすぎません。

子どもとは何かという問題に、立ち戻つてみましょう。子どもじみたことをする人が、子どもだというのではありません。幼稚な人が必ずしも子どもだというわけではありません。人に応答すること—責任 (responsibility) や、要請に応じて仕事をする能力 (competence) というような人間の基本的態度に関する観念が大きな意味を持つ事柄なのです。もしこれらのことが、成人としての基本的な態度であるとしたら、これらのもの、つまり、他人に応答し、要請に応え、信頼に応える能力等は実際私達おとなが、自分達の中に作り上げようとしているものであると言えましょう。

他方、子どもに対しても、私たちは応答し、責任をとる感覚が、良いコミュニケーションの中で芽生えていくよう、手助けしようとなります。それは非常に小さなことでも良いのです。おかあさんが家にいない時に、犬の世話をするというような小さな責任ですね。おかあさんが帰ってきて、「ちゃんと時間に餌をあげた?」と聞くと、子どもは、「ウン、もちろん。忘れなかつたわ」と言いい、母親は「よくやつたわね」と言います。これが要請に応える能力です。つまり、子どもは、どこに餌があるか、とか、餌を作らなければならない時には、どのようにして作るかを知つていなければなりません。

他にもいろいろ例はあります。私が申し上げたいことは、応答する責任感や要請に応じ信頼に応える能力というものは、子どもだけのことではなく、まさに成人期に特徴的な資質だということです。ですから徐々に私は、子どもの中にこれらのものがで上っていくよう、子どもと共に努めるのです。こうして子どもは、段々と大人になります。大人になれば、責任を取ることができる、信頼できる人物になり、意志を伝えることができるようになります。他にも教育ではやるべきことはありますが、おわりの通り、大人は幼稚になれないのではなく、大人は子どもの状態に甘んじることができないので、ここでもまた、人間どう

しのコミュニケーションが重要になります。鏡を見て外見が立派に見えるとか、大人のように見えるとかだけでは十分ではありません。問題は、けんか腰にならずに、思っていることを、他人に正しく伝えられるかどうかということです。けんか腰になるということは、子どもの特性でしょうか。私はそうは思いません。それは完全に大人として成熟しきっていない人の特徴だと思います。

私が最初に皆さんに申し上げようと思ったのは、皆さん私が私と共に見い出し、また、子どもに対する共同の責任を持った大人同志の接觸の中で見い出でであろう、この意味の世界のことであります。そこには、信頼という基本的な状況があります。ですから私は、大人の人々に「信頼される (reliable) 人間になります」と呼びかけたい。信頼された人間になれた時、要請に応じる能力 (competence) を獲得したことになるのです。しかし、自分を過大評価してはなりません。ですから、他の大人とのコミュニケーションに対して心を開きましょう。また、他の大人からの批判や、状況の示す事実に対して、素直になります。

これで、この講演を終わりにするのがいいと思われますか、そういう通り。さあ、これからコミュニケーションを始めましょう。